《論　文》

課題文の読解過程における読者の観点および読解の特徴と読解上の問題点について

舛　田　弘　子

要　約

本研究は，文章を慎重にかつ積極的に読むことを要求される「課題文の読解」の条件下での，文章読解上の特徴を明らかにすることが目的であった。被験者は短期大学生62名であり，文章内容に関連する授業を受講した後，レポート課題の一部として，この文章読解課題が与えられた。

主な結果としては，以下の３点が挙げられる。即ち，１）文章の中でも，データの分析，まとめ，主張等を含む「解釈」部分がより重要だと判断される傾向にあった。２）読者の観点としては，「①分析・考察」，「②知識」，「③共感」の３つが見いだされた。３）読者ごとの「観点」のタイプの検討からは，約５割の読者が一貫した「観点」を持っていること，言語化可能な観点を持っているのも３割程度いることが分かった。これら，一貫した観点や言語化可能な観点があることが，読解に促進的あるいは妨害的に働く証拠は見出されなかった。

これらの結果から，この方法によって，読者の重視部分や観点を明らかにすることにはある程度成功していると思われるが，読者が注目した部分の全体的な把握が不完全であること，「読解文脈」が読者の「解釈重視」傾向に影響を与える可能性があることなどの可能性が，問題点として残されている。

キーワード：文章読解，課題状況での読解，読者の「重視部分」，読者の「観点」

問題と目的

私たちが適切に文章を読解するためには，どのような心的操作が必要なのであろうか。

「文脈」および，「知識・態度[1]」が読解に及ぼす効果に関する複数の研究の結果から（Rumelhart，1977；Chambliss，1994；舛田・工藤，1996；舛田，1997他），特定の文章を適切に理解することは，その文脈を適切に理解すること，あるいは適切な「知識・態度」を利用することによって促進される可能性が示唆されている。

しかし，通常，文章読解場面において，読者は必ずしも適切な読解を行っているわけではない。上述の研究結果と関連づけると，正しく文脈が作れないことや，適切な「知識・態度」を利用できないことなどがその原因の一部となっていると思われる。

それでは，なぜ読者は正しく文脈を作ることや，適切な「知識・態度」を利用することに失敗するのだろうか。筆者の経験から，読者は，文章の内容を理解するために重要な部分よりも，自分の主観的に理解しやすい部分に着目するためではないかと考えられる。ここでわざわざ「主観的」というのは，読者が「理解しやすい」と感じたからといって，本当に正確に理解できているとは限らないからである。さて，この「主観的な理解しやすさ」は，読者の「知識・態度」に依存すると考えられる。私たちは文章内容を理解しようとする時，通常，文字として書かれたこと以外の膨大な情報を外挿する。この際，外挿できる情報量は，当然読者の当該の内容に関連する「知識・態度」の量や質によるだろう。例えば，ある読者が球技のサッカーに興味があれば，全く興味のない読者と比べて，サッカーに関する知識はより精緻化され，正確なものであろうと考えられるし，サッカーに関する事例が使われていれば，よりその部分に着目しやすく，理解しやすいと感じるようなことが想定される。同時に，この読者は，自分の理解し得たサッカーに関する記述を中心に文脈を構成して，文章内容を理解したと考えるかもしれない。

さて，仮にこの文章がサッカーについての解説文であれば，この読者は概ね正確に読解し得ると考えられる。しかし，サッカーについての部分は１つの事例であって，文章の本筋はまた別である場合，この読者は，興味のあるサッカーについての「知識・態度」を不適切に活用した結果，文章のある一部分へ着目しすぎ，更にその結果として文章全体の文脈の理解を誤り，文章内容の理解に失敗する可能性が高いと言える。

加えて，上述のような失敗は，そのテキストが，長文で構成されている，構成が複雑である（あるテーマについての多角的な記述があるなど），内容や使用されている語句・概念が容易に理解可能なものではないなど，一語一句を慎重に読まなければ理解の難しい文章で特に生じやすいものと考えられる。

そこで，本研究では，実際読者がこのような性質の文章のどのような点に着目し，読解を行っているのかを理解することを目的とする。特に，次の２点について明らかにすることを試みる。即ち，①文章中で読者が重視する部分の特徴，②①の重視された理由（読者の観点）である。これらを明らかにすることによって，読者が文章中の何に注目して読解を進めるのかについて，また，そのような読解の特徴と問題点について，把握することを目指す。

方　　法

１．読解に使用した文章

上述の目的を達成するために，本研究では，材料として，上述の３つの条件，即ち，①長文で構成されている，②構成が複雑である，③内容や使用されている語句・概念が容易に理解可能なものではない，を満たすものとして，本研究では，「改姓～じわじわと増える夫婦別姓の容認（『現代日本人の意識構造　第五版』 pp.38-43）」という文章を使用した。この文章は，

全国の16歳以上の男女5400人を対象に行った1998年の意識調査を元に，夫婦の姓についての人々の回答のデータおよびその解釈について述べたもので，44の文から構成される，約2800字の文章である（条件①にあたる）。この文章の主な内容は大きく２つに分かれ，夫婦の姓についてのアンケート（「一般に，結婚した男女は，名字をどのようにしたらよいとお考えですか。リストの中からお答えください。」[2]）に対する，国民全体の結果と，男女別・生年別の結果を示し，それについて考察した部分と，「家」と姓，家族の一体感と姓などについて解説・考察した部分がある。このように，姓を巡った複雑な内容であること（条件②にあたる），「家」制度や姓についての法律など，読者にはなじみの薄い内容が記述されていたり，図の読解を必要とする（条件③にあたる）（詳細は Table．1）などの点を重視し，この文章が材料分として選択された。

Table．1　題材となった文章の構成

上位ブロック	下位ブロック	下位ブロックの内容
	タイトル（0）	
第　1	第１（1－5）	現行の法規定と現状
	第２（6－11）	アンケートの質問項目
	第３（12-17）	国民全体の結果の概観
第　2	第４（18-21）	結果の男女差
	第５（22-29）	男女差と生年のクロス＋まとめ
第　3	第６（30-32）	日本の姓の歴史と「家」
	第７（33-35）	個人の「姓＝『家』」観
	第８（36-39）	既婚女性の所属と姓
第　4	第９（40-43）	家族の一体感と姓＋まとめ
	第10（44）	法制化の動き

＊（　）内の数字は文の番号を示す。

２．被験者と実施の手続き

被験者は短期大学１年生女子62名であり，筆者の担当する「女性のライフコースとジェンダー」に関する３時間（90分×３）の授業を受講していた。授業の終了後，レポート課題の一部として，この文章読解課題を与えた。具体的には，「この文章を読み，重要だと思うポイントを５つ，箇条書きにしなさい。なぜ重要だと思ったのかの理由も付すこと」という課題と共に，文章を配付し，授業最終日から１週間後の提出とした。このような形式によって，課題文の読解という，文章を一字一句慎重に読むことを要求されるという条件の下で，文章読解のペースや文章中のどの部分を重視するかなどが，専ら読者である被験者の主導下にあることを意図した。

ところで，「結婚後の姓は夫婦同姓が望ましいか，別姓が望ましいか」という問題は，その

女性の生き方や価値観に依存する部分が大きいため，講義のテーマである「女性のライフコース」とは深い関わりがある。このような授業の後に文章読解を行ったのは，ジェンダーとライフコースの問題について，被験者である学生たちの知識が乏しいことが予想できたためである。姓選択と生き方の問題を扱った文章について，単に字面を追うだけでなく，内容の理解を学生たちに期待するならば，ジェンダーや女性のライフコースについて，現状を認識させるなど，ある程度の予備的な知識を持たせる必要があると考えた。ただし，特定の方向の内容への唱導を避けるため，講義の中では「夫婦別姓」の問題には触れていない。

結果と考察

1．使用した文章，および「重視部分」と「重視理由」の分類について

使用した文章は，前述のように，タイトルと44の文からなる。この文章をその内容によって10個の下位ブロックに分け，その10個の下位ブロックを，更に４個の上位ブロックにまとめる形で整理した（Table．１）。その上で，被験者が重要だとして書き抜いた部分（以下「重視部分」と記述）がどの文に当たるのかを同定した。更に，「重視部分」の内容を，ａ）データ，ｂ）解釈，ｃ）法律，ｄ）その他と，これらの複数の組み合わせによって分類した。具体的には，「ａ）データ」は，アンケートの結果などから分かった，この文章のテーマに関連する明らかな事実が述べられている部分を，「ｂ）解釈」は，この文章のテーマに関連して，事実に基づく解釈や，結果のまとめや，筆者の主張などが述べられている部分を，「ｃ）法律」とは，現行法の規定が述べられている部分を，「ｄ）その他」は，上記ａ）～ｃ）の何れにも当てはまらない部分を，それぞれ指す。なお，ａ）～ｄ）の大まかな比率は，ａ）が約５割，ｂ）が約２割，ｃ）が約１割，ｄ）が約２割となっている。

また，「重視部分」を選択した理由（以下「観点」）の記述は，その内容から，ａ）読者なりの視点で「分析・考察」したもの（「　」部分はTable．３内の表記と対応），ｂ）「知識」として重要な部分だとするもの，ｃ）「共感」したもの，ｄ）内容を「否定」するもの，ｅ）内容について何らかの「主張」のあるもの，ｆ）「感情的反応」，ｇ）文章中の他の部分を「引用」したもの，ｈ）「重視部分」の意味内容を「説明」しているもの，ｉ）「その他」の９つに分類した。

以後，これらの分類によって，分析を進めた（分類されたものの具体例としては，文末の資料を参照のこと）。

2．「重視部分」および「観点」の全般的な特徴について

前述の被験者62名のうち，欠損なく記述がなされた55名を分析の対象とした。各被験者が文章中から５箇所を選択し，それぞれについて「観点」を述べているので，分析対象箇所は全部

で275箇所となる。

まず，「重視部分」について述べる。４つの上位ブロックから満遍なく「重視部分」を選択した読者は，６人（10.9％）に過ぎなかった。多かったのは，第２・３・４上位ブロックに該当する文の選択者(20人,36.4％),第２・４上位ブロックに該当する文の選択者（10人，18.2％）などであり，延べで見ると第２＞第４＞第３＞第１の順で多かった（Table．２）。ここで多く選択された第２上位ブロックは，この文章の骨子とも言えるデータ部分の分析とまとめが記述されているブロックであり,第４上位ブロックは,文章全体のまとめや主張が展開されているブロックである。

Table．２　選択された部分はどの上位ブロックに該当するか

上位ブロック	人数（％）
１・２・３・４	６（10.9）
１・２・３	３（ 5.5）
１・２　・４	８（14.5）
２・３・４	20（36.4）
１・２	３（ 5.5）
２・３	３（ 5.5）
２　・４	10（18.2）
２	２（ 3.6）
１（のべ）	20（36.4）
２（〃）	55（100）
３（〃）	32（58.2）
４（〃）	44（80.0）

これをより詳細に検討するために，「重視部分」と下位ブロックの関係に着目すると，第５下位ブロック（男女差と生年のクロス＋まとめ：47人，85.5％）が最も多く選択され，次いで第９下位ブロック（家族の一体感と姓＋まとめ：43人，78.2％），第４下位ブロック（結果の男女差：24人，43.6％）であった。これらの抜き出された部分は何れも，データについての解釈やまとめ，及びデータを踏まえた主張部分，すなわち「ｂ）解釈」に分類される部分であった。この結果を見ると，データのような「事実そのもの」よりも，これらの「解釈（まとめ，主張)」の部分がより重要であるとみなされる可能性が示唆される。

これらの「重視部分」の属性については，「ｂ）解釈（116箇所，42.2％)」,「ａ）データ（94箇所，34.2％)」,「ｄ）その他（47箇所，17.1％)」の順で多く，「ｃ）法律」に言及したのはわずか７箇所，2.5％であった（Table．３）。上述の分類のところで述べた，これらの属性の全文章に占める比率からして，この結果は，文章全体の様々な属性の部分を読者が偏りなく重視しているというのではないということを示している。具体的に言えば，「ｂ）解釈」の占める部分は約２割であるにもかかわらず，このように高い頻度で選択されたことから，文章の解釈，まとめ，主張に当たる部分が，データそのものや，法律よりも偏って重視される傾向が改めて示されたと言える。

次いで，読者の「観点」は，多い順に，「分析・考察（107箇所，38.9％)」，次いで，「知識（91箇所，33.1％)」,「共感（45箇所，16.4％)」となった（Table．３）。ここから，大まかに言って，「①文章内容について自分なりに分析したり，考察したり出来る部分が重要だ」,「②文章を読む上で押さえるべき知識・新しい知識が得られる部分が重要だ」,「③文章内容について，共感できる部分が重要だ」の３つの観点があると推測できる。

次に，文章の属性との関連で，この「観点」をより詳細に検討する。比率の高い方から見る

Table．3　重視部分の「属性」と重視理由（「観点」）の関連

観点／属性	分析・考察	知識	共感	否定	主張	感情的反応	引用	説明	その他	計
解釈	46 (16.7)	33 (12.0)	26 (9.5)	3 (1.1)	0	2 (0.7)	3 (1.1)	2 (0.7)	1 (0.4)	116 (42.2)
データ	35 (12.7)	44 (16.0)	6 (2.2)	3 (1.1)	1 (0.4)	0	1 (0.4)	1 (0.4)	3 (1.1)	94 (34.2)
法律	2 (0.7)	3 (1.1)	1 (0.4)	0	0	0	0	0	1 (0.4)	7 (2.5)
データ＋解釈	2 (0.7)	3 (1.1)	0	0	0	0	0	0	0	5 (1.8)
法律＋データ	1 (0.4)	2 (0.7)	0	0	0	0	0	0	0	3 (1.1)
法律＋解釈	1 (0.4)	2 (0.7)	0	0	0	0	0	0	0	3 (1.1)
その他	20 (7.2)	4 (1.5)	12 (4.4)	1 (0.4)	1 (0.4)	1 (0.4)	3 (1.1)	2 (0.7)	3 (1.1)	47 (17.1)
計	107 (38.9)	91 (33.1)	45 (16.4)	7 (2.5)	2 (0.7)	3 (1.1)	7 (2.5)	5 (1.8)	8 (2.9)	275 (100)

＊数字は選択された部分の個数（５部分×55名＝275），（　）は％をそれぞれ示す。

と，「解釈×分析・考察[3]」が16.7％，「データ×知識」が16.0％，「データ×分析・考察」が12.7％，「解釈×知識」が12.0％であり，他は全て10％に満たなかった。ここから，「解釈」は，「知識」としてよりも，「分析・考察」の対象として取りあげられる傾向があるのに対し，「データ」は，「分析・考察」としてよりも，「知識」の対象とされる傾向があることが分かった。

３．読者ごとの「重視部分」の文章属性タイプと，観点タイプ，及びその関連について

読者ごとの「重視部分」，すなわち個々の読者がどのような属性の「重視部分」を選択しているかについては，「観点」とのクロス集計結果として，Table．4 に示した。

まず，５つの「重視部分」のうち，文章属性が４つ以上同一である場合を一貫型とし，それ以外を混合型とした。混合型の中の「データ」と「解釈」は，データあるいは解釈の数が多いが，単独では４つには満たないものである。また，「データ＋解釈」のように，２つが「＋」で結び合わされているものは，どちらの属性も２つ以上含まれているものである。一貫型を示したのは，15人（27.3％）であり，残りの40人（72.7％）は混合型という結果から，重視する部分に関しては，その属性にばらつきが見られると言える。更に，多いところから順に見ると，「混合型／データ＋解釈（38.2％）[4]」，「一貫型／データ（12.7％）」，「混合型／データ＋その他（10.9％）」となっていた。ここで最も多かった「混合型／データ＋解釈」を見ると，「データ部分を挙げた後，関連する解釈部分を挙げる」という抜き出し方が見られた（特に第２上位

Table. 4　重視部分の「属性」と「タイプ別観点」の関連

観点＼文章属性		一貫型			混合型						計
		データ	解　釈	その他	データ	解　釈	デ＋解	デ＋他	解＋他	混	
一貫型	分析・考察	3(5.5)	1(1.8)	2(3.6)	3(5.5)	1(1.8)	3(5.5)	1(1.8)	1(1.8)	0	15(27.3)
	知　　識	1(1.8)	2(3.6)	0	0	1(1.8)	7(12.7)	0	1(1.8)	0	12(21.8)
	共　　感	0	0	0	0	0	0	1(1.8)	0	0	1(1.8)
	そ の 他	0	0	0	0	0	0	1(1.8)	0	0	1(1.8)
混合型	分析・考察	0	0	1(1.8)	0	0	3(5.5)	1(1.8)	0	0	5(9.1)
	知　　識	1(1.8)	0	0	0	0	3(5.5)	0	0	0	4(7.3)
	共　　感	1(1.8)	0	0	0	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	1(1.8)	0	5(9.1)
	そ の 他	0	0	0	0	0	0	1(1.8)	0	0	1(1.8)
	分・考＋知	0	1(1.8)	0	0	1(1.8)	2(3.6)	0	0	0	4(7.3)
	分・考＋共	0	0	0	1(1.8)	0	1(1.8)	0	0	1(1.8)	3(5.5)
	知 ＋ 共	1(1.8)	0	0	0	0	0	0	0	0	1(1.8)
	そ の 他	0	0	1(1.8)	1(1.8)	0	1(1.8)	0	0	0	3(5.5)
計		7(12.7)	4(7.3)	4(7.3)	5(9.1)	4(7.3)	21(38.2)	6(10.9)	3(5.5)	1(1.8)	55 (100)

＊数字は人数，（　）は%，デ：データ，解：解釈，混：混合，他：その他，をそれぞれ示す。
＊混合型の中の「データ」と「解釈」は，データあるいは解釈の数が多いが，４つには満たないもの。
＊「デ＋解」のように，２つが「＋」で結び合わされているものは，どちらの「重視部分」も２つ以上含まれているもの。

ブロック）。このような抜き出し方をした場合，被験者は，データ部分および解釈部分を単独で重視したのではなく，それらの組み合わせの結果として理解できる内容を重視したと考えられる。このような視点は読解の仕方として望ましいものではあるが，一貫してそのような読解をしているものは数名にすぎなかった。この結果から見ると，前述の部分とは異なり，「解釈」部分に偏って重視されているとは一概に言い難い。

「観点」も同様に，１人あたり４以上の「観点」が同一であるものを，「一貫型」とし，それ以外を「混合型」とし，混合型の中で，一つのカテゴリー名だけのものは，そのカテゴリーが優勢だが単独では４未満のもの，２カテゴリーが「＋」で結び合わされているものは，どちらのカテゴリーも２以上含まれているものである。「一貫型」は29人（52.7％）であり，半数をやや上回る読者が，一貫した「観点」を持って読解していることが分かった。多いものから見ると，「一貫型／分析・考察[5]」が15人（27.3％），「一貫型／知識」が12人（21.8％），「混合型／分析・考察」，「混合型／共感」がそれぞれ５人（9.1％）となっている。

なお，読者の「重視部分」と「観点」は多様な組み合わせを示した。最も多かったのが，「重視部分」が混合型／データ＋解釈タイプ，かつ「観点」が一貫型／知識タイプの７名（12.7%）であったが，他は皆10％未満に留まっている。

４．観点と読解との関連について

ここでは，具体的に読者はどのような観点を持って読解をしたのか，読者自身の記述内容の分析から検討した。記述内容を詳細に見たところ，まとめて言語化できるような観点を持って

Table. 5　一貫した言語化可能な観点

カテゴリー名（人数）	具体的な「観点」（観点タイプ）
現代女性の意識の変化　(5)	・別姓賛成派が女性の中で増加（一貫／知識） ・男女差と年齢差（一貫／知識） ・男性社会と時代の変化（混合／知＋分） ・女性の意識変化（混合／共感） ・現代女性の風潮（一貫／分析／考察）
個人の尊重　(3)	・人権の尊重（混合／共＋分） ・女性の社会に対する考え方と個人の尊重（一貫／知識） ・男女平等，両性の尊重（一貫／分析・考察）●
「家」と女性の自立　(3)	・「家」制度と個人の自立（一貫／分析・考察） ・女性の自立の現れ（一貫／知識） ・多様な生き方の選択（一貫／分析・考察）●
女性と改姓　(2)	・女性の立場から見た改姓の意味（一貫／知識） ・働く女性にとって大切なこと（一貫／分析・考察）
改姓と女性の不利益　(2)	・女性は犠牲者（混合／共感） ・女性の不利・不便（混合／知識）
別姓への反感　(2)	・夫婦別姓は理解できない（混合／共＋否） ・結婚した以上は同姓にすべき（混合／分析・考察）●
姓についての考え方　(1)	・姓について様々な考え方がある（一貫／分析・考察）
一貫した共感　(1)	・文章内容に共感（一貫／共感）

＊表中の●は，不適切な読みが見られたものを示す。

いるのは19人（34.5％）であった。類似した観点ごとにまとめたものがTable. 5である。最も多かったのが，「現代女性の意識の変化」と名付けられる観点で，5人がこれに該当した。これは，文章のテーマである夫婦別姓の問題を，現代女性の意識の変化の結果として捉えている読み方である。他にも，「姓や結婚のあり方に女性の意志が尊重されるべきだ」等とする「個人の尊重」の観点（3人），「『家』制度から女性は自由であるべきだ」等とする「『家』と女性の自立」の観点（3人）などがあった。

さて，これら，一貫した観点，あるいは言語化可能な観点を持つことは，正確な読みの促進につながるものだろうか，逆に正確な読みに妨害的に働くものであろうか。この問題を考察するために，不適切な読解をしていると考えられる被験者を同定した。具体的には，「重視部分」の中で，文章のテーマと直接関わりが無い部分を抜き出した者，即ち「不適切な抜き出し」を行った者を，不適切な読解を行ったとした[6]。Table. 6には，不適切に抜き出された箇所と，個人別の不適切な抜き出しの個数を示した。不適切な抜き出しを行ったのは，13人（55人中，23.6％）であった。1箇所だけ不適切なのは6人，2箇所だけが3人であることから，ほとんどの読者は文章テーマと関係のない細部に注意を引かれて本筋を見失うことは少ないと考えら

Table. 6　不適切な抜き出しを行った読者及びその箇所の属性について

不適切な抜き出しを行った読者　13人	
１カ所　６人	混合／他２　一貫／分析・考察２　混合／分析・考察１　一貫／知識１
２カ所　３人	混合／分析・考察１　混合／共感１　一貫／分析・考察１
３カ所　２人	混合／共感１　混合／他１
５カ所　２人	一貫／分析・考察２
不適切な抜き出し箇所の属性　28カ所	
その他／分析・考察13	その他／引用３　その他／共感３　その他／知識２
解釈／否定１　解釈／共感１	その他／その他２　その他／感情的反応１
その他／主張１　法律／分析・考察１	

れるものの，５箇所全部が不適切だと評価された読者も２人いた。また，抜き出された箇所は，全部で28箇所（275箇所中，10.2％）であり，「その他の部分」の「分析・考察」13箇所，「その他の部分」の「引用」および「その他の部分」の「共感」が各３箇所，「その他の部分」の「知識」２箇所が主なところであった。文章テーマと直接関わりのない「その他の部分」について，自分の意見を展開するというのが，「不適切さ」の典型的なパターンであると考えられる。

次いで，この不適切な抜き出しを，観点の一貫性と併せて検討した。一貫した観点を持っていた人29人のうち，全てが適切な抜き出しと評価されたのは23人，不適切な抜き出しを行ったのは６人（20.7％）である。それに対し，一貫していない観点を持っていた26人のうち，全てが適切なのは19人，不適切だったのは７人（26.9％）であった。この結果には有意な差は認められない（$x^2(1)=.295$ ns.）。また，言語化可能な観点を持っていた19人のうち，適切なのは15人，不適切なのは４人（21.1％），言語化可能な観点を持っていない36人のうち，適切なのは27人，不適切なのは９人（27.8％）であり，こちらも有意な差は認められない（$x^2(1)=.107$ ns.）。これらの結果から，一貫した観点と，読解の適切性は特に関連があるとは言えない。

更に，適切な読解を行っていると判断できるものについて，その観点を検討した。「適切な箇所を抜き出していること」に加え，「５つの抜き出し箇所を繋げると，全体として文章の流れが理解できる」を基準に，適切な読みを行ったものについて検討した。適切な読みを行ったと判断できるものは，４人（55人中，7.3％）に過ぎなかった。これは，前述のように，抜き出す上位ブロックに偏りがあったのが最も大きな原因と言える。この中で，一貫した観点を持っているのは３人，言語化可能な観点を持っているのは２人であったが，残念ながら人数が少ないため，適切な読解との関連について，明確な結論を出すには至らなかった。

討　　論

本研究では，「文章を慎重に読むことを要求される条件の下，文章読解事態は専ら読者である被験者の主導下に置く」という方法を用いて，読解の特徴，観点，問題点などを明らかにす

ることが目指されていた。

第１に，読者の「重視部分」の特徴について，今回の方法との関連で述べる。問題と目的の部分では，読者が自身の「主観的に理解可能な部分」，即ち，文章を理解するために必要と考えられる部分からはずれて，自身の興味・関心・知識などと関連する部分をより読み取る可能性について触れた。これに関して，今回の「重視部分」では，文章の属性の構成比率に比べて，解釈部分の選択される比率が非常に高く，また，文章全体から重視すべき部分を抽出するのではなく，特に「まとめと主張」中心のブロックからのみ抽出している読者も多かったことがわかった。これは，冒頭に掲げた文章の主旨の理解という点からは，不適切であるとは言えない。

しかし，このような読みの問題点も指摘することができる。読者たちの行った「まとめ・主張・解釈重視型」の読解は誤っているわけではないが，これらの「まとめ・主張・解釈」というのは文章のごく一部であり，それを把握しても，文章全体を理解したことにはならない。更に，今回の題材文のように，データや法律などの細かい事実が挙げられているものについては，「筆者のまとめや主張」をそのまま受け入れるのではなく，事実から読者なりの読みとりを行い，併せて「筆者のまとめや主張」の妥当性を検討するというのが，文章から情報を抽出する場合のより望ましい読解のあり方であろう。だが，「結果と考察」の部分で述べたように，「データ部分および解釈部分を単独で重視したのではなく，それらの組み合わせの結果として理解できる内容を重視する」という読解を一貫して行った読者はわずかであった。

さて，このような，「まとめ・主張・解釈」の重視はなぜ生じたのだろうか。今回の課題は，「重視部分を５つ抜き出せ」という，抽出数を限定したものであったので，抽出しないことがすなわち着目していないこととは単純には言えないが，このような偏りは，読者たちのそれまでの読解経験に起因すると考えられる。通常，いわゆる「説明文・論説文」の読解で読者に求められるのは，「要旨把握」であり，加えて，この「要旨」を見つけるためには，文中の「まとめ，主張，解釈」の部分を見ればよい，というのは国語の試験問題を解く際の定石でもある。今回はこのような「要旨把握のための『まとめ・主張・解釈』重視」のアプローチが取られた可能性がある。このアプローチを促進する要因として，読者の側に，「大学のレポート課題（評価の対象である）として読む」という読解状況の文脈判断があることも考えられる。つまり，完全に自由な読解スタイルで読むというのではなく，「学校場面での読解で求められるような読解」をしようとした結果である可能性がある。

また，これらの「まとめ・解釈重視（要旨把握）型」とは全く逆に，文章テーマに直接関わりのない部分（その他の部分）を重視する読者も決して少なくはなかった。これは，問題と目的の部分で挙げた，「主観的な読み」に正に従う結果と言える。結果と考察のところで見たように，このような読解を行っている読者で，全体の要旨を完全に見失うものは少なかった。しかし，その他の部分により注目してしまうことで，テーマに関連したより重視すべき部分を見落とすことにもつながるという点では望ましいものではない。

第２に読者の観点についてである。「①分析・考察」，「②知識」，「③共感」の３つの観点のうち，「②知識」という観点は，文章を読む上で必要かつ適切なものだと思われる。なぜなら，私たちが文章を読む大きな目的の一つが，自分にとって必要な情報の抽出であることが多く，その場合には適切な情報に着目することが求められる。この「適切な情報」が「知識」と考えられるためである。また，読解は一般に文脈を作りつつ行うものとされるが，文脈を作る際にも，適切な情報，即ち「知識」に着目することが必要なのは言うまでもない。

他方で，①「分析・考察」と③の「共感」の観点については，必ずしも適切とは言えない。文章を読んで意味を理解するに留まらず，そのテーマについて自分なりの意見を持つこと，理由・背景を考えること，また，共感したり反感を感じたりすることは，文章内容を語用論的に理解するという点から重要なのはもちろんである。しかしながら，読者の分析・考察が文章のテーマや文脈から大きく逸脱したものであったり，あるいは文章の細部にだけとらわれて共感・反感を抱くような，不適切なものである場合に，①・③の観点では文章全体の意図を正しく把握できない可能性が危惧される。実際，「その他の部分／分析・考察」が，不適切な読みの約半数を占めていたことは，この危惧を傍証するものとなろう。

ところで，この読解過程の課題では，読者に直接問われているのは，「重視した理由」である。もちろん「理由」とは，「なぜ重要だと思ったか」への回答として記述されるべきものであり，「その問題に関してあなたはどう考えるか（＝分析・考察）」や，「賛成・共感できるか（＝共感）」ではない。今回の結果から見る限り，読者たちは，自分たちに与えられた課題を拡大解釈（あるいは誤解）している可能性がある。しかし，これもまた，レポート課題という読解文脈が，「なにか論じる必要があるのではないか」，「賛否を表明する必要があるのではないか」などの圧力を，被験者たちに与えた結果生じた可能性もある。

最後に，上述の事項をふまえて，今回取った研究手法について論じる。この方法を用いることによって，読者がどのような部分を重視し，どのような観点を持ちながら読んでいるかを明らかにすることにはある程度成功していると思われる。これは，事前事後テスト法においては把握の難しい内容であるため，この意味ではこの方法は有効であったと言えるだろう。しかし，いくつかの問題点はなお残っている。例えば，①読者が注目した部分（重視しただけでなく）を全て把握できるわけではないこと，②重視理由を記述する能力に個人差があるため，重視理由が十分把握できない場合もあること，③レポート課題という「読解文脈」の特殊性がある特定の読み（要旨重視など）を促進する可能性があること，等である。今後，これらの諸問題を検討しつつ，読解過程について明らかにすることが必要であろう。

註１　この場合の「態度」とは，読者が持つ，そのテーマに関する見解，イメージ，問題意識，観点など全てを指すものである。
２　NHK 放送文化研究所　編　2000　『現代日本人の意識構造　第五版』　付録　pp.10　より引用。
３　この部分の表記は「属性(A)×観点(B)」となっている。これは被験者が，「属性(A)を，観点(B)の対象として取りあげた」ことを表す。
４　この部分の表記は「属性のタイプ(A)／属性(B)」となっている。これは被験者が，「属性タイプ(A)で，具体的には属性(B)を示した」ことを表す。
５　この部分の表記は「観点のタイプ(A)／観点(B)」となっている。これは被験者が，「観点タイプ(A)で，具体的には観点(B)を示した」ことを表す。
ここでは，抜き出された部分と，その抜き出した理由を含めて，適切性を判断している。

参考文献

１．Chambliss, M.J. 1994 Why Do Readers Fail to Change Their Beliefs After Reading Persuasive Text? In Garner, R. & Alexander, P.A. (Eds.) *BELIEFS ABOUT TEXT AND INSTRUCTION WITH TEXT* Lawrence Erlbaum Associates
２．舛田弘子・工藤与志文　1996　初学者に対する「文脈効果」を応用した読解指導の有効性について－古文教材を用いて－　教育心理学研究　第44巻　第４号　pp.445-453
３．舛田弘子　1997a　文章の読解と学習者の知識・意見との関連について－社会的事象を扱った教材文を用いて－　仙台白百合女子大学紀要　第２号　pp.13-26
４．舛田弘子　1997b　社会的事象を扱った文章の読解に及ぼす学習者の知識・意見の影響　読書科学　第41巻第３号　pp.81-90
５．NHK 放送文化研究所　編　2000　『現代日本人の意識構造　第五版』 NHK ブックス　880
６．Rumelhart，D.E.／御領謙訳　1979　『人間の情報処理　新しい認知心理学への誘い』サイエンス社

Reader's Standpoint, Characteristics, and Problems in Reading Comprehension

MASUDA, Hiroko

The purpose of this study was to investigate the characteristics of reading comprehension under the "reading as a task" conditions that were needed careful and positive reading. The subjects were junior college students (N=62), who took a lecture concerned with the content of text as a material of this study, and given a task of "reading the text for writing report on it".

The main results were as follows: 1) the most important parts of the text judged by subjects included the analysis of the data, the conclusions, and the claims of author ("interpretation"), and the data presented in the text ("data"). 2) As the standpoints in reading processes of subjects, "analysis and consideration", "knowledge", and "sympathy" were found out. 3) The examination of the reading types of each subject showed that around 50% of subjects had a consistent standpoint in reading processes and that around 30% of subjects had a standpoint which could be expressed verbally. There was no evidence that having such standpoints can facilitate or obstruct their reading comprehension.

From these results, the procedure of this study partly succeeded to clarify the most important parts of text judged and picked out by subjects and the standpoints in reading processes, but it still had difficulties to grasp all parts of text which readers paid attentions. And there was the possibility of given "reading as a task" context influenced readers' tendency to think "interpretation" parts of text as the most important.

Keywords: the reading comprehension, reading as a task, the important parts of the text judged by readers, the standpoints of readers.

（ますだ　ひろこ　本学人文学部助教授　言語コミュニケーション心理学専攻）

資　料（文末の数字は文章番号を表す）

●**「データ」部分に着目し，「分析・考察」の例**

夫婦の名字は必ずしも夫の名字でなくとも良いと考える人が，女性の中で増えている。20

理由：女性の中でこの考えが定着すれば社会も変化し，いずれは別姓が社会で認められるようになると考えたから。

●**「データ」部分に着目し，「知識」の例**

夫の姓に統一しなければならないという考え方が徐々に後退し，反対に夫婦別姓でも良いという考え方がじわじわと増えている。17

名字についての考え方が男性同様世代でほぼ決まっている。25

男性で名字に対する考え方の違いがある。35

理由：夫婦別姓が認められてから，男女や世代で違いはあるが，女性の意見も少しずつ認められて来ていると感じ，重要である。

●**「データ」部分に着目し，「共感」の例**

夫の姓に統一しなければならないと言う考え方は徐々に後退し17

理由：当然だ。

●**「解釈」部分に着目し，「分析・考察」の例**

夫婦別姓を容認する傾向は，「家族は同姓でなければならない」という家族観の揺らぎであり，結婚したら女性が改姓するというこれまでの「常識」に対しての疑問の投げかけである。41

女性では同じ名字を名乗ることよりも一人一人の努力によって家族の絆は生まれると考えている。42

理由：家族の問題にまで発展する夫婦別姓は，夫婦の価値観や家庭の土台をしっかりしていれば解決することだと考えたから。

●**「解釈」部分に着目し，「知識」の例**

夫婦の名字をどのようにするかということは，実は姓とは何か，個人とは何か，結婚とは何か，家族とは何かなどの根本的な問題と深く関わっている。40

理由：名字は生きる上でいろいろなところで意味を持ち，簡単なものではないことを表しているから。

●**「解釈」部分に着目し，「共感」の例**

特に女性では同じ名字を名乗ることよりも一人一人の努力によって家族の絆は生まれると考えている。42

理由：この意見にとても賛成である。同じ名字を名乗っていても，全く何も話さないなら絆は生まれない。家族が協力して助け合って生きているからこそ絆は生まれていくから。

●**「その他」部分に着目し，「分析・考察」の例**

「夫婦別姓は家族の一体感が損なわれる」と言う意見がある。42

理由：確かに自分の家でも父の家の名字なので夫婦同姓を当たり前のように感じていたが，別姓にすることが本当に家族の一体感を損なうのだろうかと考えた。

●**「その他」部分に着目し，「知識」の例**

「個人の尊重」「男女平等」

理由：夫婦間や社会での差別をなくし，個人の意見を認められる権利があると言うことを明確に示しているから。

●**「その他」部分に着目し，「共感」の例**

夫婦は同じ名字を名乗るべきだが，どちらが名字を改めても良い。10

理由：完全に夫婦別姓に賛成ができないため，やはり結婚するならば，どちらかの名字を名乗るのがよい。